地獄の季節註解（一）

小田良弼

訳文はランボオ全集Ⅰ、Ⅱ、（人文書院刊）および小林秀雄全集、「地獄の季節」を借用した。しかしまま私見にしたがって、括弧〔　〕を附して、私訳を添へたところもある。

原文は Arthur Rimbaud: Une Saison en Enfer, Mercure de France, Paris, 1952. によった。附記頁数は本書による。

Une Saison en Enfer :

ランボオは、主客二元対立の相対的世界、そこに出発する知性、知性に基く一切の文化、日常常識的実利的世俗界、に対する徹底的な、狂暴に近いまでの絶望的な否定行に始まり、その否定の彼方に死の世界、虚無の世界を見出した。さらにその否定として、即ち否定の否定としての還相行において、相対即絶対、絶対即相対としてのランボオ的世界がひらかれ、そこに絶対的真実の世界、永遠、キリスト教の神ならぬ神、此岸の神を見出し、そこに絶対安楽行を行じたのである。

かかるランボオ的世界が真にひらかれるまでの世界がランボオにおいては地獄 Enfer であったのである。Matin, p. 80 において

Pourtant, aujourd'hui, je crois avoir fini la relation de mon enfer. C'était bien l'enfer ; l'ancien, celui dont le fils de l'homme ouvrit les portes.

だが、今日となつては、俺も、俺の地獄とは手を切つたと信じてゐる。いかにも地獄だつた、人の子が扉を開けた、昔乍らのあの地獄だつた。

といってゐる様に地獄であったのであり、真にランボオ的世界がひらかれるに至ってこの地獄と「手をきり」、「アデイウ」を告げるに至るのである。Adieu, p. 87 の最後のところで、

j'ai vu l'enfer des femmes là-bas ; —— et il me sera loisible de *posséder la vérité dans une âme et un corps.*

俺は下の方に女共の地獄を見た、——さて、俺には、魂の裡にも肉体の裡にも、真実を所有する事が許されよう。

といってゐる様に、この地獄にアデイウを告げることにおいて、「身心

に真実を」所有するに至ったのである。真にランボオ的世界がひらかれ、絶対安楽行を行ずるに至ったのである。この絶対安楽行において、地獄と「手を切」り、「アデイウ」を告げることができたのである。

この「地獄の季節」はかくランボオが地獄に「アデイウ」を告げるに至るまでの経過、その苦闘を語るものである。

そしてこの Saison なる語は

O saisons, ô châteaux (Cf. A. Rimbaud : Poésies, p. 217.)

における saisons や Fêtes de la Patience, I, Bannières de Mai における

Je veux bien que les saisons m'usent.

この Saisons とその使ひ様を同じくするものである。この Saisons はその時その時に際会する四季を文字通りに指してゐるものであり、その時その時に際会するそれぞれの季節に絶対の、神の現成を行じようとする意味で上記の様な詩句が出てきてゐるのである。即ち目にふれ、耳にふれる世界を媒介として絶対の、神の現成を行じようとする意味をもった詩句なのである。Une Saison en Enfer における Saison も、かかる目にふれ、耳にふれる世界、季節をさしていふのである。ただそれが前者の二例の場合は絶対の、神の現成の媒介となる季節であったが、今の場合はそれが地獄における季節なのである。

*　*　*　*　*

Jadis, si je me souviens bien, ma vie était un festin où s'ouvraient tous les coeurs, où tous les vins coulaient.

嘗ては、若し俺の記憶が確かならば、俺の生活は祭であつた。誰の心も開き、酒といふ酒は悉く流れ出た祭であつた。

この七頁より九頁に至る一節は、「地獄の季節」全篇、Mauvais Sang, Nuit de l'Enfer, Délires I, Délires II, L'impossible, L'éclair, Matin, Adieu に対するいはば序文にあたるものである。したがってこの短い一節において、Adieu において身心共に真実を所有することにおいて地獄にアデイウを告げるに至るまでの経路を、極めて簡潔にレジュメしてをり、且つ最後に注目すべきことは筆をとるに至ったことに対する弁明の言葉が添へられてゐることである。もともとランボオの世界は、思慮分別を超えた世界であり、したがって言語を超えた世界であり、また本来言葉をもって語ることを無用とする世界でもあった。いやさらに言葉をもって語るといふことが冒瀆にすらなる様な世界であったのである。何故ならランボオの世界、絶対、神は如何なる意味においても実体化すること、対象化することを許さない世界であった、(Cf. Les Illuminations, Vies : Il ne faut même plus songer à cela. Je suis réellement d'outre-tombe,…) しかも言葉をもって語るといふことは、言葉がかかる世界の自覚的言語としての意味をもつにもせよ、なほかかる世界について語るといふことは、その世界を対象化する危険をまぬがれることができないからである。

かくてランボオは、この「地獄の季節」その他において幾度か語る様に、言語に対してはいつも絶望的であり、また語ることを無用のこととしてゐるのである。ちようど禅宗系統の人々において「不立文字」がい

はれ「万言万答不如一黙」といはれるのと全くその軌を一にするものといってもよいであらう。「不立文字」「万言万答不如一黙」といひながら、一方さかんに文字をたてざるを得なかった様に、ランボオにおいても、少くともこの「地獄の季節」執筆当時においては、言語に対しては絶望的であり、語ることを無用とは考へながらも、なほ文字をたてざるを得なかったのである。かくて

je vous détache ces quelques hideux feuillets de mon carnet de damné.

なる弁明の言葉がそへられてゐるのである。ここに狭義における詩人としてのランボオが存在するのである。地獄にアデイウを告げ、身心共に真実を所有するに至ったのではあるが、なほそれは思想としてであることはまぬがれなかったともいへよう。「不立文字」といひながら、さかんに文字をたてざるを得ない必然的な理由はあるにしても、なほ文字をたてることが、ランボオ的世界を、その対象化といふ一点で冒瀆するものであることもまぬがれなかった。かくてこの後"Les Illuminations"の幾篇かの執筆の後、遂に筆を捨てたのである。筆を捨てた時、その時こそランボオの詩的世界は完璧に行じられたのである。ランボオは放浪に詩を完璧に行じたのである。ここに広義の詩人としてのランボオが存在するのである。

上述の意味において、この「地獄の季節」は狭義の詩人としてのランボオの言葉とみるべきものであらう。しかし思想的にはもはや充分に成熟してをり、且つかかる弁明の言葉をそへたといふこと自体が、後々の放浪に完璧なる詩を行じた広義の詩人としてのランボオをすでに暗示してゐるものといへるであらう。

ma vie était un festin:——

この festin は、言葉の意味は祭の饗宴であるが、それは日常的世俗的世界における生活を意味するものであらう。もちろん、voyant としての目がひらかれるまでの自己の世界を回想した言葉である。

Cf. Fêtes de la Patience, 2; Chanson de la plus haute Tour.

Oisive jeunesse
A tout asservie,
Par délicatesse
J'ai perdu ma vie.
Ah! Que le temps vienne
Où les coeurs s'éprennent.

何事にも屈従した
無駄だつた青春よ、
繊細さのために
私は生涯をそこなつたのだ。
〔生活を失ったのだ。〕

おお！　心といふ心の
陶酔する時の来らんことを！

かく過ぎ去った日の Vie perdue を悔んでゐる。

また、Mauvais Sang, p. 23 で

Mais l'orgie et la camaraderie des femmes m'étaient interdites.

だが、酒宴も女等との交友も、俺には禁じられてゐた。

といってゐる。否定せられるべきものとして酒宴と女等との交友（ランボオにおいては、女は世俗の象徴である。Cf. Délires I, etc.）があげられてゐる。festin はこれらと一類であり、否定せられるべきものとしての日常的世俗的世界における生活である。したがって、

où s'ouvraient tous les coeurs, où tous les vins coulaient.

とは、かかる酒宴や女等との交友のあることを意味する。したがってまた、ここに出てくる vins は、散見するところの enivre, boire, ivre などの語と連関をもつ vins ではない。上掲の orgie に連関する vins である。かかる日常的世俗界が否定せられるところに、Mais toujours seul ; sans famille ; (Mauvais Sang, p. 16.) とか Pas même un compagnon (ibid., p. 23.) とか atroces solitudes (Les Soeurs de Charité) とかいってゐる孤独が出てくるのである。自ら philosophie féroce (Démocratie) といってゐる様な徹底的な否定行の結果である。

Un soir, j'ai assis la Beauté sur mes genoux. —— Et je l'ai trouvée amère. —— Et je l'ai injuriée.

或る夜、俺は『美』を膝の上に坐らせた。——苦々しい奴だと思った。——俺は思ひつきり毒付いてやつた。

ランボオが『美』を如何に考へてゐたかは、けっして単純な問題ではない様である。しかし、詩（美）を「先駆するもの」として考へてをり、けっして単なる対象の描写にあるのではないとしてゐたことだけは確かである。「先駆するもの」とは「根源的なるもの」あるいは「一切の根拠」の意である。ランボオの世界が相対的世界の否定、さらに否定の否定として絶対否定即絶対肯定的に、目にふれ耳にふれる感覚的世界を媒介として、絶対、神の現成を行ずるにあった。即ちこの目にふれ耳にふれる感覚的世界が、絶対、神の象徴としての意味をもつ、そのことに対する認識、自覚に「先駆するもの」としての詩（美）が成立したのである。だから単なる対象の描写に、ランボオ自身の言葉を借れば、単なる「行動の韻律化」に美は存在しなかったわけである。かくて、Délires II, p. 51 で

Depuis longtemps je me vantais de posséder tous les paysages possibles, et trouvais dérisoires les célébrités de la peinture et de la poésie moderne.

俺は久しい以前から、世にありとある風景が己れの掌中にあるのが自慢だった。近代の詩や絵の大家等は、俺の眼には馬鹿々々しかつた。

といってゐる様に、詩を「先駆するもの」、「一切の根拠」として考へてゐればこそ、「ありとある風景」が己が掌中にあり得るわけであり、単なる対象の描写としての近代の詩や絵の大家達はランボオの目には馬鹿々々しく映ったのである。また同 p. 54 で

O, pour ces Ouvriers charmants
Sujets d'un roi de Babylone,
Vénus ! quitte un instant les Amants
Dont l'âme est en couronne !

ヴィナスよ、『職人共』の為に、
バビロンの王の可愛い家来達の為に、
暫くは心驕った『愛人達』を、
離れて来てはくれまいか。

ともいふわけである。

ここでいふ、俺の膝の上に坐らせた「美」は、単なる対象の描写、「行動の韻律化」に成立した、いはゆる美をさして言ってゐるのである。それはランボオにとっては、ばかばかしくもあり、苦々しくもあったわけである。

なほランボオにおける美については、いづれ後に当該箇処において述べるはずであるが Les Illuminations, Being Beauteous, Matinée d'Ivresse 等を参照のこと。なほまた Une Saison en Enfer, p. 61 (Délires II), p. 69 (L'impossible), p. 63 (Délires II), p. 84 (Adieu) 等参照。ランボオにおいては美は「先駆するもの」として同時に真実であり、善であったが、「地獄の季節」上記の箇処においては、絶対、神の現成を行ずることに凡てがかけられ、美が影をひそめて行く傾向が見られる。あたかも「イノサンス」においては「聖浄な神の愛」も救済すらも影をひそめる、といふよりは此等を意識することすらない純一無雑の世界であった様に、美を否定してゐるのではなく、その行為の純一無雑さに意識の上から美が影をひそめて行くのである。（後述参照）

Je me suis armé contre la justice.

俺は正義に対して武装した。

ランボオの立場は善とか悪の、したがって正義の立場を超えた立場にあった。したがって正義は否定せられるべきものであった。しかしそれは善悪のない世界ではない。還相行においては絶対否定即絶対肯定的に善悪にゐて、しかも善悪にゐないのである（Cf. Mauvais Sang, p. 20—p. 21）。もちろん、それは善悪の直接的肯定ではない。

Cf. Les Illuminations, Matinée d'Ivresse.

On nous a promis d'enterrer dans l'ombre l'arbre du bien et du mal, de déporter les honnêtetés tyranniques, afin que nous amenions notre très pur amour.

俺達の最も純粋な愛を醸し出す為に、善悪の樹を暗闇の中に埋葬し、暴君的な誠実を流刑に処する事を、俺達は約束されたのだ。

Cf. L'Homme juste

Ah! qu'il s'en aille, lui, la gorge cravatée
De honte, ruminant toujours mon ennui,……
……
Socrates et Jésus, saints et justes, dégoût!
Respectez le Maudit suprême aux nuits sanglantes.

ああ！　奴は行くがいい、屈辱のネクタイを胸につけ
俺の倦怠をいつまでも反芻しながら、……
……
ソクラテスにイエス様、聖者に正義派、汚らはしや！
血潮にまみれた夜な夜なの呪はれた人間こそ敬ふがいい！

Cf. Qu'est-ce pour nous

Périssez! puissance, justice, histoire: à bas!

滅びてしまへ！　権力も、正義も、歴史もあるものか！

Je me suis enfui. O sorcières, ô misère, ô haine, c'est à vous que mon trésor a été confié !

俺は逃げた。あゝ、魔女よ、悲惨よ、憎しみよ、俺の宝が託されたのは貴様等だ。

Je me suis enfui :—

かくて、二元対立の相対的世界から逃げるわけである。一切の否定行をさすのである。「酔船」の前半四、五節参照。たとへば、

Comme je descendais des Fleuves impassibles,

のごときもかかる否定行を示すものと考へられる。その他、

Cf. Les Poètes de sept Ans.

—Tandis que se faisait la rumeur du quartier,

En bas,—seul, et couché sur des pièces de toile

Ecrue, et pressentant violemment la voile !

——下界に高まる巷のざわめきを

よそに、——彼はただ一人、生布の敷布に寝ころんで、

はげしくも帆布を予感してゐたのだ！

Cf. L'impossible, p. 67.

J'ai eu raison dans tous mes dédains : puisque je m'évade !

俺も逃亡ときめるからには、俺のあらゆる侮蔑にはそれぞれ理由は持つてゐた。

また、Nuit de l'Enfer, p. 35 で

Ah çà ! l'horloge de la vie s'est arrêtée tout à l'heure. Je ne suis plus au monde.

さうだ、生活の時計は、先刻止つた許りであつた。俺はもはやこの世にはゐないのだ。

といつてゐる様に、この否定行は生活からの頽落を意味するわけであり、そこに劣等種族 race inférieure (Mauvais Sang, p. 15, 16, 18. 後述参照) が出現するのである。

その他、Les Illuminations ; Départ, Démocratie, etc. 参照。

mon trésor : ——

これは、diamant (Solde), de l'or (Mauvais Sang), pierres précieuses (Après le Déluge), boules de saphir (Enfance) 等と一連をなす言葉で、ランボオの世界をさしてゐる。このランボオ的世界が託されたのが魔女であり、憎しみであり、悲惨であつたのである。ランボオ的世界がこれらに託されたとは、これらによつてそれがひらかれたのだとの意である。

魔女 sorcière とは、Délires I, p. 45 で

Il a peut-être des secrets pour *changer la vie* ? Non, il ne fait qu'en chercher, me répliquais-je. Enfin sa charité est ensorcelée, et j'en suis la prisonnière.

この人は多分人の世を変くる秘密を色々持つてゐるのぢやないのかしら、いやいやただそれを捜してゐるだけだ、と妾は考へ直しました。何と申しましても、あれの愛には魔法がかかつてゐるのです。

といってゐる様な、人の世を変へる秘密の法をもってゐるものとしての「魔女」である。もちろん、それは日常的世俗界の否定を媒介とするからである。またこの日常的世俗界の否定には常にそれに対する憎みをともなふものであり、ランボオにおいては特にはげしい憎悪の声をいたるところできくのである。また、Adieu, p. 83 で

L'automne. Notre barque élevée dans les brumes immobiles tourne vers le port de la misère, la cite énorme au ciel taché de feu et de boue.

秋だ。俺達の舟は、動かぬ霧の中を、纜を解いて、悲惨の港を目指し、焔と泥のしみついた空を負ふ巨きな街を目指して、舳先をまはす。

といってゐる様に、世俗としての現世は悲惨の港であったのである。もちろん世俗の立場からは、その悲惨、不幸が悲惨、不幸として自覚されてはゐない。

Cf. Mauvais Sang, p. 23.

Je me voyais devant une foule exaspérée, en face du peloton d'exécution, pleurant du malheur qu'ils n'aient pu comprendre, et pardonnant!

銃刑執行班をまともに眺め、激怒した俗衆の面前に俺は立つてゐたのだ、彼等には解らない不幸に歔き乍ら、そして彼等を宥し乍ら。

といってゐる様に、世俗の立場においては理解し得ない悲惨、不幸を悲惨、不幸として自覚するところに、したがってかかる世俗としての現世の否定、それに対する憎悪、そこからの解脱否定にランボオ的世界(宝)がひらかれるに至るのである。即ち「俺の宝」がこれら魔女、悲惨、憎しみに託せられたといふ所以である。

Je parvins à faire s'évanouir dans mon esprit toute l'espérance humaine. Sur toute joie pour l'étrangler j'ai fait le bond sourd de la bête féroce.

俺はたうとう人間の望みといふ望みを、俺の精神の裡に、悶絶させて了ったのだ。あらゆる歓びを絞殺する為に、その上で猛獣の様に情容赦もなく躍つたのだ。

この「人間の望みといふ望み」を「悶絶させて了った」とは、望みのあるところには、望みの対象が生れ、主客対立、二元の相対的世界が生れる。そこに、知性、文化も出発し、吾我の執着も生れる。そこに一切の煩悩の根源があり、抽象化の根源がある。かくて望みの否定がランボオ的世界展開の前提となる。

Cf. Fêtes de la Faim.

Ma faim, Anne, Anne,
Fuis sur ton âne.
……
Mes faims, tournez. Paissez, faims,
Le pré des sons!
Attirez le gai venin

Des liserons ;

……

Mes faims, c'est les bouts d'air noir ;
　L'azur sonneur
—C'est l'estomac qui me tire.
　C'est le malheur.

Sur terre ont paru les feuilles !
Je vais aux chairs de fruits blettes.
Au sein du sillon je cueille
La doucette et la violette.

……

俺の飢餓よ、アンヌ、アンヌ、
驢馬に乗つて失せろ。

……

飢餓よ、あつちけ。草を喰(ハ)め、
　音の牧場に！
昼顔の、愉快な毒でも
　吸ふがいい。

……

飢餓とはかい、黑い空気のどんづまり、
　空鳴り渡る鐘の音。
—俺の袖引く胃の腑こそ、
　それこそ不幸といふものさ。

土から葉つぱが現はれた。
熟れた果肉にありつかう。
畑に俺が摘むものは
野髙苣(ノヂシヤ)に菫だ。

……

これは無求、無一物をうたった詩である。望みといふ望みを一切否定しさることは無求、無一物を行ずることである。そのことがまた、絶対、神を行ずる道でもある。だから、「音の牧場に草を喰め」といふのである。この「音の牧場」といふのは、ランボオ的世界、絶対をいふのである。ランボオは自己の世界をしばしば音楽をもって象徴してゐる。（後述参照）。また、

Le loup criait sous les feuilles
En crachant les belles plumes
De son repas de volailles :
Comme lui je me consume.

Les salades, les fruits
N'attendent qne la cueillette ;
Mais l'araignée de la haie
Ne mangent que des violettes.

……

食事にとつた飼鳥の
きれいな羽を吐き出して、
樹蔭で鳴いた狼の
真似して俺も饗れよう。

野菜のサラダや果物の
もがれる許りでゐるものを、
垣根の蜘蛛めの食ふものは
ただ、紫の菫草。

……

これも前掲の詩と一連のものであり、無求無一物をうたったものである。

つぎの「あらゆる歓びを絞殺する」といふのも上述と同じ意味であり、この「歓び」も世俗的歓びであり、espérance humaine である。le bond sourd といふのは小林氏の訳にある様に、情容赦もない躍りをいふのである。情容赦もなく、世俗的歓び、espérance humaine を否定し去るのである。fin aisée (Angoisse) を否定し去るのである。la bête féroce といふのは、ランボオ自身がいってゐる philosophie féroce (Démocratie) の象徴である。

J'ai appelé les bourreaux pour, en périssant, mordre la crosse de leurs fusils. J'ai appelé les fléaux, pour m'étouffer avec le sable, le sang. Le malheur a été mon dieu. Je me suis allongé dans la boue. Je me suis séché à l'air du crime. Et j'ai joué de bons tours à la folie.

俺は死刑執行人等を呼び、絶え入らうとして、奴等の銃の台尻に咬みついた。連枷を呼び、血と砂とに塗れて窒息した。不幸は俺の神であった。泥の中に寝そべり、〔俺は泥の中に寝そべつた。〕罪の風に喉は涸れ、而も俺が演じたものは底抜けの御座興だつた。

J'ai appelé les bourreaux :——

この bourreaux は、Mauvais Sang, p. 23 で

Je me voyais devant une foule exaspérée, en face du peloton d'exécution, pleurant du malheur qu'ils n'aient pu comprendre, et pardonnant !

銃刑執行班をまともに眺め、激怒した俗衆の面前に俺は立つてゐたのだ、彼等には解らない不幸に歔き乍ら、そして彼等を宥し乍ら。

といってゐる、この peloton d'exécution に照応する語である。日常の常識的世俗的世界、文化の世界一切の否定としての bourreaux である。また同じく Mauvais Sang, p. 27 で

Je ne serais plus capable de demander le réconfort d'une bastonnade.

俺にはもう笞刑の助力を頼む事も出来まい。

といってゐる。ここでは還相行として bastonnade の助力を拒否してゐるが、この bastonnade の意味は peloton d'exécution と同じく、やは

り日常の常識的世俗的世界、文化の世界の一切の否定を意味してゐる。かくてこの bourreaux を呼んだといふことは

Qu'est-ce pour nous, mon coeur, que les nappes de sang
Et de braise, et mille meurtres, et les longs cris
De rage, sanglots de tout enfer renversant
Tout ordre; et l'Aquilon encor sur les débris;

俺の心よ、血と燠の、真赤な水脈と大虐殺、
長く尾を曳く憤怒の叫喚、秩序は一切くつがくす
地獄の底のすすりなき、それが一体何だつて？
廃墟の上には今日もなほ北風さむく吹くばかり。

といってゐる、この一切合切の否定としての mille meurtres にあたる言葉である。

また、否定せられるべき煩悩、苦悩が多く死に関係する語で表現せられてゐることも、参考にあげておかう。noyé(Bateau ivre)spectre(Ville) etc.

なほその他、Cf. Conte

Il tua tous ceux qui le suivaient,……

彼は従ふ人々をすべて殺した。……

ランボオにおいては、自ら philosophie féroce, bête féroce といってゐる様に、その否定行には兇暴に近いまでの激しさがあった。

en périssant, mordre la crosse de leurs fusils:——

といふのは、一切合切を否定しつくさうとする、その徹底的否定行のはげしさを語る言葉であらう。

J'ai appelé les fléaux, pour m'étouffer avec le sable, le sang:——

連伽を呼んだといふことは、意味はさきの死刑執行人を呼んだといふことと同じであり、重ねてその意を強調してゐるわけであり、その激しさ、その徹底さ、その悪戦苦闘を語るものであらう。もちろん直接的にはこの連伽によって、血と砂にまみれて窒息するまでたたきのめすことをいってをり、したがって、bourreaux を呼ぶことと、fléaux を呼ぶこととの間には語感上のかなりの相違のあることは認めねばならない。

Cf. Bateau ivre.

Quand les juillets faisaient crouler à coups de triques
Les cieux ultramarins aux ardents entonnoirs;

折しもあれや、七月は　燃ゆる漏斗の碧瑠璃の
空を忽ち棍棒の乱打に　崩壊し了んぬ。

Le malheur a été mon dieu:——

この「不幸は俺の神であつた」とは如何なる意味であらうか。この le malheur は、前にも引用した Mauvais Sang, p. 23 における

Je me voyais devant une foule exaspérée, en face du peloton d'exécution, pleurant du malheur qu'ils n'aient pu comprendre, et pardonnant!

といってゐる、この malheur である。世俗の人達の理解することのできない不幸である。この不幸は欲求があるといふこと、したがってその欲求の対象が存するといふこと、したがって主客対立の相対的抽象的世界にあって我執の世界にゐるといふこと、そこに根ざす不幸である(Cf. Fêtes de la Faim.)。それは、日常の常識的実利的世界にあっては、か

かる欲求、その対象が存することは当然のことであり、そこに一切の煩悩が根ざしてゐることを理解しない。ランボオはかかる二元対立の相対的世界を一切合切否定して、最も具体的真実なる世界に到達することに煩悩解脱を求めたのである。ところがその一切合切の、兇暴なまでの絶望的な否定の彼方にひらかれた死の世界、虚無の世界（この方向をさして、今、往相と称しておきたい）をさらに否定して（否定の否定として絶対否定的即絶対肯定的に）この悪の世界、不幸の世界に還帰する、死の世界、空の世界が即悪の世界、不幸の世界であることの自覚に到達する（この面を、今、還相と称しておきたい）（Mauvais Sang, p. 20—p. 21. Bateau ivre, etc 参照）。「不幸は俺の神であつた」とは、この還相行において、不幸の絶対否定即絶対肯定の立場を表現してゐるものである。彼岸の彼方に神を求めてゐるのではなくて、この此岸に、したがって不幸の中に神の現成を行じようとしてゐるのである。かかる還相行においてこそ、ランボオの神、永遠がひらかれたのである。

Cf. Génie.

O monde! et le chant clair des malheurs nouveaux!

おお、世界よ、新らしい不幸の清澄な歌声よ。

Cf. Mauvais Sang, p. 25.

Vais-je être enlevé comme un enfant, pour jouer au paradis dans l'oubli de tout le malheur?

俺は小児の様に攫はれて、あらゆる不幸を忘れ、天国に戯れようとするのであるか。

Je me suis allongé dans la boue: ——

泥 boue といふのは、たとへば Mauvais Sang, p. 23 で

Dans les villes la boue m'apparaissait soudainement rouge et noire,...

突然、俺の眼に、過ぎて行く街々の泥土は赤く見え黒く見えた、…

あるいはまた、Enfance, V, で

A une distance énorme au-dessus de mon salon souterrain, les maisons s'implantent, les brumes s'assemblent. La boue est rouge ou noire. Ville monstrueuse, nuit sans fin!

俺の地底のサロンの上を遙かに遠く隔つて、人々の家が竝び立ち、霧が立ちこめる。泥は赤く或は黒い。怪物の都会、果てしない夜。

といってゐる様に、又 Mémoire, 5, で

Mon canot, toujours fixe; et sa chaîne tirée

Au fond de cet oeil d'eau sans bords, — à quelle boue?

丸木舟はいつもつながれてゐる、その鎖をば

ひろびろとしたこの流れの眼の底に曳きずつて、——どんなに泥深いかしら?

といってゐる様に、いづれも停滞、醜悪を意味してゐる。即ち二元の相対的世界に附随する一切の煩悩の世界をさしてゐるのである。停滞、一所に住すること、執着に煩悩がきざすからである。したがって flache, marais 等いづれも同様の意味をもつ。

Cf. la flache noire et froide (Bateau ivre)

marais occidentaux　　(L'impossible)

西洋、近代文化の世界である西洋を同様の意味で沼と見てゐるのである。そしてこの沼、泥に対するものが l'eau claire, mer, fleuve, flots であつたのである。

かくて「俺は泥の中に寝そべつた」とは、還相行として、この醜悪、停滞、悪徳の世界である此岸のこの現世に足を据ゑたことを意味するのである。即ち「不幸が俺の神であつた」といふのと同じ意味のことをいつてゐるのである。

Cf. Mauvais Sang, p. 20.

Reprenons les chemins d'ici, chargé de mon vice, le vice qui a poussé ses racines de souffrance à mon côté, dès l'âge de raison —qui monte au ciel, me bat, me renverse, me traîne.

又、足元の径を辿り直すとしようか、この身の悪徳を背負つて、物心がついてこの方、俺の脇腹に苦悩の根を下した悪徳を、——空にも翔り、俺を叩きのめしては引き廻す悪徳を。

Je me suis séché à l'air du crime : ——

Délires I, p. 44 で

Oh! ces jours où il veut marcher avec l'air du crime!

ああ、あれが罪の風にのつて歩かうとする日の事を思ひますと。

といつてゐる様に、ここでも l'air du crime といふ言葉を使つてゐる。ここの段落では、世俗としての現世に対する嫌悪、根源的「自然」に還らうとするはげしさを示してゐる。そのことを指して il veut marcher avec l'air du crime といつてゐるのである。もちろんそれは世俗の象徴

としての「狂気の処女」の言葉としてである。即ち世俗的日常常識の立場から見ての「罪」、この現世否定の方向をさして罪といつてゐるのである。かくて「罪の風と共に歩く」とは、この世俗としての現世の否定行を意味するのである。

そこで Je me suis séché à l'air du crime とは、たとへば、Comédie de la Soif, I, Les Parents で

Nous sommes tes Grands-Parents,
　　Les Grands!
Couverts des froides sueurs
De la lune et des verdures.
Nos vins secs avaient du coeur!
Au soleil sans imposture
Que faut-il à l'homme? boire.

Moi—Mourir aux fleuves barbares.

Nous sommes tes Grands-Parents
　　Des champs.
L'eau est au fond des osiers:
Vois le courant du fossé
Autour du château mouillé
Descendons en nos celliers;
Après, le cidre et le lait.

Moi — Aller où boivent les vaches.

Nous sommes tes Grands-Parents ;
Tiens, prends
Les liqueurs dans nos armoires ;
Le Thé, le Café, si rares,
Frémissent dans les bouilloires.
—Vois les images, les fleurs.
Nous rentrons du cimetière.

Moi — Ah! tarir toutes les urnes!

俺達がお前の親なのだ、
お前の爺さん婆さんだ。
お月様と青草の
冷い汗にまみれてさ。
作つた地酒にや脈がうつ。
陰日向のない陽(ヒ)を浴びて、
一体人間に何が要る、飲む事を。

俺——蠻地の河でくたばりたい。

俺達がお前の親なんだ、
この野原の御先祖様だ。
柳の奥には水が湧く、
湿つたお城を取巻いて、
見ろ、お堀の水の流れるのを。
俺達の酒倉に入つて来い、
林檎酒(シイドル)もある、牛乳もある。

俺——飲むなら牝牛の飲むところで。

生みの親なら遠慮はいらぬ。
さあ、飲んでくれ、
戸棚の酒はお好み次第、
なんならお茶か珈琲か、
飛切りのやつが湯沸かしで鳴つてらあ。
——見たけりや絵もある花もある。
墓所は見納めとするこつた。

俺——いつそ甕(カメ)といふ甕が干したいものさ。
といひ、またその五、Conclusion で
Les pigeons qui tremblent dans la prairie,
Le gibier, qui court et qui voit la nuit,
Les bêtes des eaux, la bête asservie,

Les derniers papillons…ont soif aussi.

……

牧場にふるへる鳩たちも、
夜が来るまで追ひまはされる鳥も獣も、
水に棲んでる生き物も、人に飼はれた生き物も、
それから秋の蝶々も……みんな喉は渇いてゐるのだ。

といってゐる。この Parents は渇をいやしてくれる泉としての Parents である。そしてすべてのものがいやされねばならぬ渇をもってゐる。かくて「罪の風に喉は涸れ」とは、この世俗としての現世の否定行において、そこからの逸脱を求めるはげしい想い、その「渇き」をさしてゐるものと考へられる。

Et j'ai joué de bons tours à la folie:——

かくのごとくに、世俗としての現世からの逸脱を求めるはげしい渇きに喉はひりひりとかれたのだが、そこで俺は一体何を演じたといふのだらう。全く底抜けの御座興にすぎなかったのだ。世俗としての現世からの逸脱を求めて、煩悩、苦悩なき、悪徳なき世界への逸脱を求めるならば、それは単なる観念的彼岸の世界への逸脱逃避にすぎない。bourreaux を呼び、fléaux を呼んだことはその意味で全く底抜けの御座興にすぎなかったのだ。かくて Et j'ai joué de bons tours à la folie なる言葉は J'ai appelé les bourreaux pour,…… J'ai appelé les fléaux, ……に対する反省の言葉と見るべきであらう。

Le malheur a été mon dieu. Je me suis allongé dans la boue. といってゐる、この還相行においてこそ、神の現成を見ることができ、真に救はれるのである。

Et le printemps m'a apporté l'affreux rire de l'idiot.

かうして春はむごたらしい痴呆の笑を齎した。

上記の様に bourreaux を呼び、fléaux を呼んだことに対する反省があり、「不幸が俺の神」であることを自覚し、「泥の中に寝そべつた」この還相行において、春がむごたらしい痴呆の笑ひをもたらすのである。le printemps は煩悩解脱の世界の象徴と見てよいであらう。

Cf. Mémoire, 4.

Or des lunes d'avril au cœur du saint lit!
神聖な臥床の奥に射し入る四月の光の金よ!

Cf. Entends comme brame.

Entends comme brame
près des acacias
en avril la rame
viride du pois!
聽け波羅門僧の如く
アカシヤの樹々のほとりに
四月　副木にからむ腕豆の
さ緑の生命(イノチ)の息吹を

この様に、春、四月が煩悩、苦悩解脱の世界、即ちランボオ的世界、即ち「自然」の意に多く使はれてゐる。

rire de l'idiot とはどういふ意味であらうか。

Délires I. p. 46 で、

j'avais de plus en plus faim de sa bonté. Avec ses baisers et ses étreintes amies, c'était bien un ciel, un sombre ciel, où j'entrais, et où j'aurais voulu être laissée, pauvre, sourde, muette, aveugle.

妾はだんだんあれの優しい情に飢ゑて来ました。あれに接吻されて優しい手に抱かれながら、妾の這入つて行つた処は空でした、悲し気な空でした。そして其処に、耳も聞えず目も見えず、口もきけない哀れな姿で、とり残されるならとり残されても構はない、と妾は思ひました。

といってゐる、この条は示唆にとむ。これは idiot の世界でもあらうから。また同じく p. 48 で

"Une femme s'est dévouée à aimer ce méchant idiot : ... " ... il riait affreusement, longtemps.

〃ある女が身も心も投げ出してこの根性曲りの馬鹿者を愛して了ふ、……〃……あれは長い事恐ろしい位笑つて居りました。

といってゐる、この箇処は、ほとんど決定的に rire de l'idiot の意味を示す様に思はれる。この ce méchant idiot は地獄の夫が自らを称していふ言葉であり、Il riait の Il は地獄の夫である。そして、この地獄の夫はランボオ的世界の象徴であるから、méchant idiot である「あれ」の「笑ひ」、即ち rire de l'idiot は絶対、神の笑ひである。ランボオにおける絶対、神の世界は、自然法爾の世界であり、非情の世界であり、無畏の世界であり、またイノサンスの世界であった。かかる世界は idiot をもって表現するにふさはしい一面をそなへてゐる。そしてかかる絶対、神の笑ひは Il riait affreusement, longtemps とあった様に、それが非情の世界であり、イノサンスの世界であるからには、恐しくむごたらしい笑ひでもあるわけである。そしてその笑ひは上掲 p. 48 で

Hélas! il avait des jours où tous les hommes agissant lui paraissaient les jouets de délires grotesques :

ああ、蠢いてゐるすべての人間達が、あれにはきつ怪な気狂ひの玩具に見えたひと頃もあつたのです。

といってゐる様なことに基く笑ひであったのである。今の場合においても春が痴呆の笑ひをもたらしたのは、底抜の御座興に対してもたらしたむごたらしい非情の笑ひであったのである。なほ Fêtes de la Patience, I, Bannières de Mai においても、

C'est rire aux parents, qu'au soleil,
Mais moi je ne veux rire à rien ;

御先祖様〔親達〕や日輪様にはお笑草でもあらうけど、
俺は何にも笑ひたかない

といってゐる。親達や太陽の笑ひである。

Or, tout dernièrement m'étant trouvé sur le point de faire le dernier *coup*! j'ai songé à rechercher la clef du festin ancien, où je reprendrais peut-être appétit.

La charité est cette clef.—Cette inspiration prouve que j'ai rêvé!

処が、つい此の間の事だ。いよいよ最後のへま〔調子はずれ〕も

仕出かさうとなつた時、俺は昔の祭の鍵はと思ひ迷つた、存外又食気が起らぬものでもあるまいと。

慈愛はこの鍵だ。——こんな考が閃いた処を見れば、俺はたしかに夢を見てゐたのだ。

上述の所で、「不幸が俺の神であつた」といふ還相面が述べられ、日常世俗界の単なる否定が「底抜けの御座興」に過ぎなかったことの反省があり、「春がむごたらしい痴呆の笑ひ」をもたらしたのであった。

ここではその徹底還相行が語られてゐる。徹底還相行とは、否定を媒介として、否定による死の世界の否定として、即ち否定の否定として絶対否定的にこの現世 festin ancien に立ち還ることであり、その立ち還りは個人的に個性的に千差万別ではあるけれども、そこにランボオ自らがいってゐる言葉でいへば、古めかしい隠遁 vieilles retraites といひ得る様な現世からの逃避を一切許さず、いやさらに嫌悪、反逆 dégoûts, trahisons をなすこともなく、何が嫌だといふこともなく、何処が嫌だといふこともなく (réponds à tout, entre partout)、一切を是とする積極性をすらもって徹底的に立ち還ることである。積極性をすらもって徹底的に立ち還るといっても、この世俗としての現世の直接的肯定ではない。どこまでも否定を媒介とした絶対肯定的な立場においての立ち還りである。立ち還りであるからには悪徳にゐることは事実であるが、しかも悪徳にゐない。矛盾してゐて矛盾してゐないのである。道元の言葉を借りるならば「莫作(マクサ)」の世界であらう。この莫作において徹底的に festin ancien に立ち還ることである。そこに、即ちこの festin ancien を媒介として、即ち際会する諸季節に、眼前の事象を媒介として、絶対、神の現成を行じようとするのである (Cf. Fêtes de la Patience, I, Bannières de Mai ; O saisons, ô châteaux.)。

この徹底還相行においては再び appétit も生ずるわけである。Faim (欲求) が否定せられ (Cf. Fêtes de la Faim.)、そこに無求、無一物の世界が出てきた。しかしこの徹底還相行における appétit は、この無求、無一物と矛盾するものではない。いや、矛盾してゐて矛盾しないのである。それは appétit の直接的肯定ではないことを意味する。Bannières de Mai において、

A toi, Nature, je me rends ;
Et ma faim et toute ma soif.
Et, s'il te plaît, nourris, abreuve.
自然よ、此の身はおまへに返す、
こんな渇きも空腹(ヒモジサ)も。
お気に召したら、食はせろよ、飲ませろよ。

といってゐる様に、faim, soif はどこまでも否定せられてゐて、しかもそれに食はせろ、飲ませろといふのである。食ってゐて食はず、飲んでゐて飲まないのである。食ってゐずして食ふのであり、飲んでゐずして飲んでゐるのである。それがここでいふ appétit なのである。かくてこの appétit は無求、無一物と矛盾してゐて矛盾してゐないのである。

かかる appétit を生み出すところの festin ancien を開く鍵をさがし求めたのである。そこで、最後の couac をやらうとしたわけである。

それではこの couac とは何を意味するであらうか。couac は son dis-

cordant 調子はずれの音である。これはランボオが、絶対、神の世界をしばしば音楽にたとへてゐることから出てきてゐるのである。

Cf. Guerre.

C'est aussi simple qu'une phrase musicale.

音楽の一楽節の様に埒もない。〔単純だ。〕

Cf. Génie.

Son jour! l'abolition de toutes souffrances sonores et mouvantes dans la musique plus intense.

彼の日。あらゆる苦悩は張りきつた音楽の中に鳴り動き消えて行く。

Cf. Fètes de la Faim.

Mes faims, tournez. Paissez, faims,

Le pré des sons!

飢餓よ、あつちへ。草を喰へ、

音の牧場に！

即ち、この音楽に対する couac (son discordant)、それはあたかも Being Beauteous において

Et les frissons s'élèvent et groundent et la saveur forcenée de ces effets se chargeant avec les sifflements mortels et les rauques musiques que le monde, loin derrière nous, lance sur notre mère de beauté,

戦慄は立ち昇り、唸りを上げる。そしてこれらの効果に気の狂つた味ひは、俺達の遙か背後から、俺達の美の母親めがけてこの世が投げる、死人の喘ぎと嗄れた音楽の音に充塡されるが、

といってゐる「嗄れた音楽」に照応するものと見てよからう。

即ちこの couac をやらうとしたことは、前述の様な意味での徹底還相行を語るものと解することができるのである。

La charité est cette clef. — Cette inspiration prouve que j'ai rêvé!: —

ここでいふ charité は如何なる意味の charité であらうか。Génie において、

O lui et nous! l'orgueil plus bienveillant que les charités perdues

おゝ、彼と俺達、失はれた数々の慈愛よりも、遙かに好意のある倨傲さだ。

といってゐる。この Génie は「再創始された完全な尺度たる、予見を許さぬ驚くべき理智たる愛であり、また、永遠である。」「憤怒と倦怠との裡に佇んで、嵐の空と恍惚のはためく旗の間」を通って行く Génie である。そして無辺際界に、無所去無所従来的に開かれた Génie であり、そこに「あらゆる苦悩は消て行く。」そこではまた慈愛は失はれて charités perdues、遙かに好意のある倨傲 l'orgueil plus bienveillant がある。そしてかかる世界においてこそ「新しい不幸の清澄な歌声」があげられるのである O monde! et le chant clair des malheurs nouveaux!。

「不幸が俺の神」であり、「泥の中に寝そべつた」徹底還相行において「不幸の清澄な歌声」があげられるのであり、かかる歌声のあげられる徹底還相行においては l'orgueil plus bienveillant があって、そこには charité はもはやない。かくもはや charité が失はれたところにこそ、

ランボオの「愛」が生れるのである。

Adieu, p. 84 で

Moi! moi qui me suis dit mage ou ange, dispensé de toute morale, je suis rendu au sol, avec un devoir à chercher, et la réalité rugueuse à étreindre! Paysan!

といった後で p. 85

Suis-je trompé? la charité serait-elle soeur de la mort, pour moi?

俺は誑されてゐるのだらうか。俺にとつて、慈愛とは死の姉妹であらうか。

といつてゐる。Paysan としてのこの立場においては、charité が「死の姉妹」であるならば、それは否定せられるべきである。Paysan と死の姉妹とではその相を異にしてゐるからである。

かくて、今、festin ancien を開く鍵をさがし求めてゐる徹底還相行においては、「不幸の清澄な歌声」がきかれ、l'orgueil plus bienveillant の世界であつて、charité は失はれてしまつてゐるはずなのである。それだのに「死の姉妹」としての charité がこの festin ancien を開く鍵だと、そんな考が閃いたことは、まだまだ夢を見てゐたことを示すに外ならないわけである。charité と festin ancien とはその相を異にしてをり、前者は後者を開く合鍵とならうわけはないからである。かくて Adieu, p. 85、上掲の文のすぐ後で、

Enfin, je demanderai pardon pour m'être nourri de mensonge. Et allons.

最後に、俺は自ら虚偽を食ひものにしてゐた事を謝罪しよう。さて行くのだ。

といふわけであり、また Mauvais Sang, p. 25 でも

Vais-je être enlevé comme un enfant, pour jouer au paradis dans l'oubli de tout le malheur?

俺は、小児の様に攫はれて、あらゆる不幸を忘れ、天国に戯れようとするのであるか。

といつてゐる。ランボオは Les Soeurs de Charité においては、

O Mort mystérieuse, ô soeur de charité.

といつてゐる様に、かつては、死に soeur de charité を求めたのであるが、今、徹底還相行においては、Paysan であり、orgueil bienveillant の世界にあつて、死の姉妹としての charité は否定せられてゐるのである。観念的彼岸の世界を夢みることを否定してゐるのである。

《Tu resteras hyène, etc…,》 se récrie le démon qui me couronna de si aimables pavots. 《Gagne la mort avec tous tes appétits, et ton égoïsme et tous les péchés capitaux》

『お前はやつぱり駄狗であるさ…』など、いかにも可憐な罌粟の花で、俺を飾つてくれた悪魔が不服を言ふ。『死を手に入れる事だ、お前の慾念、利己心、七大罪のすべてを傾けて』

Tu resteras hyène, etc… : —

この hyène は強慾あくなきことの象徴と見てよいであらう。それは前のところで、où je reprendrais peut-être appétit. といつてゐる、その

appétit を受けて、デモンがかくいふのである。「いくらでも食ふがよい」といった様な、皮肉を交へたデモンの悪罵の言葉である。

即ち前のところでは、徹底還相行として絶対否定即絶対肯定的に現世に立ち還ることを述べてゐる。否定せられるべき appétit の絶対肯定が述べられてゐる。その appétit はだから、もちろん、食って食はず、食はずして食ふ様な appétit ではあるけれども、とにもかくにも、appétit のあることは確かである。そのことに対してデモン、現世否定への誘引者としてのデモンが不平をいふわけである。皮肉を交へた罵りの言葉である。

Cf. Délires I, p. 43.

Le Démon!—C'est un Démon, vous savez, *ce n'est pas un homme.*

『悪魔』ですとも。あなた様も御承知です、あれは悪魔です、人間ではありません。

と「狂気の処女」がいふ様に悪魔は常識的意味での「人間」ではない。この常識的人間否定の悪魔であり、それは前にも引用した様に「人の世を変へる秘密の法」をもったものとしての悪魔である。即ち現世否定への誘引者であり、往相行における悪魔であってみれば、その飾ってくれるものは aimables pavots でもあらう。この aimables pavots は Mémoire における

Plus pure qu'un louis, jaune et chaude paupière
le souci d'eau

一ルイ金貨よりも浄らかに、黄色く燃えた流れの眼瞼
水に咲く金盞花よ

この金盞花を思はせるものがある。

Gagne la mort avec tous tes appétits,……:——

デモンは、さきには Tu resteras hyène, etc と還相行に対して、皮肉を交へた悪罵をあびせかけたのだが、ここでは現世否定への誘引者として、現世否定の彼方に死を手に入れることを求めてゐるのである。即ちこれはデモンの還相行に対する反撥である。avec tous tes appétits, et ton égoïsme et tous les péchés capitaux とは、これらすべてをふり捨てよとの意であらう。死の世界は一切合切の否定の彼方に見出された世界であるからには、それはデモンとしては当然の要求であらう。

Ah! j'en ai trop pris:— Mais, cher Satan, je vous en conjure, une prunelle moins irritée! et en attendant les quelques petites lâchetés en retard, vous qui aimez dans l'écrivain l'absence des facultés descriptives ou instructives, je vous détache ces quelques hideux feuillets de mon carnet de damné.

あゝ、俺は死なんか食ひ過ぎて了った、——処で親愛なる悪魔、お願ひだ、そんな苛立たしい眼付をしないでくれ。愚図々々してゐれば、いづれしみったれた臆病風に見舞はれる、どうせ貴方には作家の描写教訓の才などといふものは御免だらう。俺の奈落の手帖の目も当てられぬ五六枚、早速貴方から掻払はして戴く事にする。

Ah! j'en ai trop pris:——

さきにデモンが、皮肉を交へた悪罵をあびせかけ、さらに還相行に対

する反撥として、死を手に入れよといったことに対するランボオの言葉である。世俗としての現世否定、そこにあらわれた死の世界の否定としての、還相の立場にあるものの言葉として、これは当然の言葉であらう。

ここで、かかる死の世界の否定としての還相をいひあらはしてゐるランボオ自身の言葉を二三引用しておかう。

Cf. Vies.

Dans une magnifique demeure cernée par l'Orient entier j'ai accompli mon immense œuvre et passé mon illustre retraite. J'ai brassé mon sang. Mon devoir m'est remis. Il ne faut même plus songer à cela. Je suis réellement d'outre-tombe, et pas de commissions.

俺は東洋全土で囲まれた壮麗な住居で、自分の大業を完成して、赫々とした隠遁を過した。俺は、俺の血液を攪拌した。再び、務めはこの手に戻った。これについては、夢みる事すら許されぬ。本当に墓場の向ふから来たこの俺だ、何の用事があるものか。

この一文はランボオの全思想に連る極めて重要な意味をもってゐる。死の世界の否定としての還相行を語るとともに、その徹底還相行が如何なるものであるかについても簡潔に語られてゐる。

Cf. Adieu, p. 84.

Moi, moi qui me suis dit mage ou ange, dispensé de toute morale, je suis rendu au sol, avec un devoir à chercher, et la réalité rugueuse à étreindre! paysan!

この俺、嘗っては自ら全道徳を免除された道士とも天使とも思った俺が、今、務めを捜さうと、この粗々しい現実を抱きしめようと、土に還る。百姓だ。

Cf. Qu'est-ce pour nous.

O malheur! je me sens frémir, la vieille terre,
Sur moi de plus en plus à vous! la terre fond.
ce n'est rien; j'y suis; j'y suis toujours.

おゝいたましや！俺は知る、老いぼれ大地の震きは、
次第次第に高まって！　大地は遂に崩れだす。
《何でもないや、俺は居る、相も変らず俺は居る》

Mais, cher Satan, je vous en coujure, une prunelle moins irritée: —

ランボオの還相行に対して、皮肉を交へた悪罵をあびせかけ、また死を手に入れよと反撥を加へたデモンとしては、ランボオの還相行に対してはいらだたしさを感ずるわけである。

en attendant les quelques petites lâchetés en retard: —

この lâchetés は勇気がなくなること、筆をとって書くことに対する勇気がなくなることを意味するのであらう。それはこのつぎに、vous qui aimez dans l'écrivain l'absence des facultés descriptives ou instructives, je vous détache ces quelques hideux feuillets de mon carnet de damné. といってゐるからである。即ち筆をとる勇気がなくならない内に何枚かの hideux feuillets de mon carnet de damné をかっぱらって記さうといふのである。

ところがランボオの世界は、この時この所の一時一事に前後際断的に絶対、神の現成を行ずるにあったのであり、如何なる意味においても対象化、実体化することを許さない世界であった。（上掲 Vies; Il ne faut même plus songer à cela. 参照）ところが言葉をもって記すといふことは、この対象化の危険を犯すことをまぬがれない。またかかる世界が思慮分別を、したがって言語を超えた世界でもあった。そこに筆をとって記すことに対する lâchetés が生ずるのである。だからランボオはいつも、言葉に対しては絶望的であり、また否定的であったのであり、遂に筆を捨てて放浪に詩を行じたのである。

Cf. O saisons, ô châteaux.

Que comprendre à ma parole?

Il fait qu'elle fuie et vole!

私が何を言ってるのかって?

言葉なんぞはふっ飛んじまくだ!

Cf. Mauvais Sang, p. 17.

Je comprends, et ne sachant m'expliquer sans paroles païennes, je voudrais me taire.

俺には解ってる、ただ、解らせようにも外道の言葉しか知らないのだ、あゝ、喋るまい。

冒頭において述べた様に、この p. 7—p. 9. は全篇に対する序文に当るところであり、Mauvais Sang その他において言語に対する絶望的否定的思想が語られてゐるので、今、序文としてここで、筆をとって記すことに対する弁明として、かく述べるわけである。

Vous qui aimez dans l'écrivain l'absence des facultés descriptives ou instructives:——

世俗としての現世否定への誘引者としてのサタンは、死の世界、寂静の世界、隠遁の世界へと誘ふわけであるから facultés descriptives ou instructives のないことを望むわけである。

je vous détache ces quelques hideux feuillets de mon carnet de damné:——

記述教訓の才なきことを望むサタンから、手帖の数葉をかっぱらふといふことは、本来書くことに対して、言語に対して否定的であり、絶望的でありながら、なほ筆をとって書かうとすることに対する弁明の言葉である。

damné とは、本書の標題が示す様に、ランボオ的世界に到達するまでの世界が地獄の世界であることによるのである。Adieu, p. 86 で

Mes derniers regrets détalent,—des jalousies pour les mendiants, les brigands, les amis de la mort, les arriérés de toutes sortes.—Damnés, si je me vengeais!

俺の最後の未練は逃げる、——言はば乞食、盗賊、死の友、あらゆる落伍者への嫉妬だが、——復讐成った以上は亡者共だ。

といってゐる、この亡者共 Damnés と同じ意味である。世俗としての現世否定の彼方に出てきたこれら「死の友」も還相の立場においては地獄の Damnés であるわけである。もちろんランボオ的世界においては、実は地獄即涅槃、涅槃即地獄であるわけだが、今はその意味ではなく、ランボオ的世界に到達するまでの世界が地獄であり、その意味での

地獄にアディウするまでの迂余曲折を記さうとしてゐるのであるから、mon carnet de damné といふわけである。したがって、かかる手帖であってみれば、それは hideux でもあらう。

Mauvais Sang

Mauvais sang : ——

「血」といふ語は、ランボオにおいては、たとへば Délires I, p. 43 で

Je suis de race lointaine : mes pères étaient Scandinaves : ils se perçaient les côtes, buvaient leur sang.

俺は遠い国の部族の生れだ、俺の先祖はスカンヂナヴィヤの人々だ、奴等はお互の脇腹を刺違へては血を啜り合ったものだ。

といってゐる様に、人間に生得のもの、人間をしてその人間たらしめてゐる最も根深いものといふ様な意味をもってゐる。したがってそれは悪徳の根源としての意味ももってゐる。したがってまた、ランボオのはげしい、狂暴なまでの否定行には多くこの「血」、またはそれと連関のある語が使はれてゐる。一切合切の否定はこの悪徳の根源としての「血」に至るまでの否定をめざすからである。たとへば、

Qu'est-ce pour nous, mon cœur, que les nappes de sang
Et de bruise, et mille meurtres, et les longs cris
De rage, sanglots de tout enfer renversant
Tout ordre ; et l'Aquilon encor sur les débris ;

俺の心よ、血と燠の、真赤な水脈と大虐殺、
長く尾を曳く憤怒の叫喚、秩序は一切くつがへす
地獄の底のすすりなき、それが一体何だって？
廃墟の上に今日もなほ北風さむく吹くばかり。

これなどもその一例である。また、Chanson de la plus haute Tour で

Et la soif malsaine
Obscurcit mes veines,

今ただわけも分らぬ渇きが
私の血をば暗くする。

といってゐる様に、渇き、欲求が、人間における最も根深いものとしての血を暗くする。人間を根柢から地獄の世界にくつがへすのである。かかる意味で使ってゐる。

かくて mauvais sang とは、人間をして煩悩具足の人間たらしめてゐる最も根源的な生得のものとしての意味をもつ。あたかも上掲 Chanson de la plus haute Tour における soif malsaine によって、暗くされた血といふ様な意味をもつ。

この Mauvais Sang 一篇は、かかる mauvais sang との闘ひ、そして最後に絶対肯定的にこの mauvais sang に安住せんとするいきさつを語るものである。

J'ai de mes ancêtres gaulois l'oeil bleu blanc, la cervelle étroite, et la maladresse dans la lutte. Je trouve mon habillement aussi barbare que le leur. Mais je ne beurre

pas ma chevelure.

蒼白い眼と小さな脳味噌と喧嘩の拙さとを、俺は祖先ゴオル人達から承け継いだ。この身なりにしたって、彼等なみの野蛮さだ。まさか頭にバタをなすりはしないが。

ancêtres gaulois:——

ランボオには古代、蛮地に対する強い憧れがある。それはランボオにおける「自然」としての古代であり、蛮地である。ランボオにおける「自然」は対象的な自然でもなければ、ロマンチストの自然でもなく、いはば絶対無の象徴としての自然であり、往相即還相、還相即往相として、今、ここの一時一事に、前後際断的に、絶対、神の現成を行じ、無求、無一物を行じて行く世界を「自然」といってゐるのである。太古、蛮地はかかる自然の具現してゐる世界としての太古であり、蛮地であるのである。この ancêtres gaulois もかかる「自然」の具現してゐる世界としてここにあげてゐるのである。

Cf. O saisons, ô châteaux.

O vive lui, chaque fois
Que chante son coq gaulois.

ゴールの鶏(トリ)が鳴くたびに、
「幸福」こそは万歳だ。

Cf. Michel et Christine.

—Et verrai-je le bois jaune et le val clair,
L'Epouse aux yeux bleus, l'homme au front rouge, ô Gaule,
Et le blanc Agneau Pascal, à leurs pieds chers,
—Michel et Christine, —et Christ!—fin de l'Idylle.

—やがて俺には見えるのか、黄色い森と明るい谷、
青い眼相の人妻と、赤い額のその夫、おゝゴールよ、
そして二人の足元に、踰越祭の白仔羊
—これぞミシェルとクリスチーヌ—それにキリスト！ —牧歌の終焉。

その他、

Il porte à la nature en fleur son front saignant. (Les Sœurs de Charité) Mourir aux fleuves barbares. (Comédie de la Soif) 等参照。

l'œil bleu blanc:——

ランボオにおいて色彩は多くの場合に、象徴的意味合をもってゐる。bleu については、Voyelles において

A noir, E blanc, I rouge, U vert, O bleu: voyelles,
……
O, suprême Clairon plein de strideurs étranges,
Silences traversés des Mondes et des Anges:
—O l'Oméga, rayon violet de Ses Yeux!

Aは黒、E白、I赤、U緑、Oは藍色、
……
O、奇怪の鋭き叫びの満ち盈てる　至上の喇叭
大千世界と天使とを　貫ける沈黙よ。

—おおオメガ、かの人の眼の　紫の光線。

あるいは Bateau ivre において

Où, teignant tout à coup les bleuités, délires
Et rythmes lents sous les rutilements du jour,
その大海に、忽焉と波の群青を色に染め、
金紅燦たる日の下の　錯乱か　緩るき韻律か、

あるいは上掲 Michel et Christine の

L'Epouse aux yeux bleus, l'homme au front rouge, ô Gaule,

のごとく、相対的世界の否定の彼方に見出された寂静の世界の、静けさ、安らかさを象徴するものと考へられる。

blanc については同じく Voyelles において

A noir, E blanc, ……
……
…E, candeurs des vapeurs et des tentes,
Lances des glaciers fiers, rois blancs, frissons d'ombelles;
Aは黒、E白、……
……
…E、靄と天幕のあどけなさ、
傲然たる氷河の槍尖、真白き光芒、繖形花(オンベル)の顫動(フノノキ)。

あるいは、Bateau ivre において

J'ai rêvé la nuit verte aux neiges éblouies,
燦々と眩き雪の　緑の夜を……われ夢みたり。

といってゐる様に、あどけなさ、清純なるをののき、またそのきびしさを象徴するものと見てよい。

かくて l'oeil bleu blanc はきびしさをもった（否定行にともなふ）、空の寂静、安らかさ、あどけなさを示す眼を意味するものと考へてよい。即ちこの蒼白き眼は、「自然」を具現してゐるところの ancêtres gaulois のもつ、汚れなき、神の現成してゐる、寂静の、清純なる、あどけなき眼である。

La cervelle étroite: ——

La cervelle étroite とは、知性、はからひのなさを示す。知性は主客の対立にその出発点をもつ。したがって主客対立の相対的世界を徹底的に否定しようとしたランボオとしては、この主客の対立に出発点をもつ一切のものを否定するわけである。ancêtres gaulois は上記の様に「自然」の具現してゐる世界であった。今、自分はこの ancêtres gaulois から、その cervelle étroite 即ち知性、はからひのなさを受け継いだ。そこにこそ相対的世界を超えて、絶対、神も現成し得るわけである。

知性に関しては、Cf. Les Assis.

Ces vieillards ……
Sentant les soleils vifs percaliser leur peau,
老耄(オイボレ)先生……
太陽の生きた光が　布漉しに皮膚に照るのを感じたり、

Cf. Honte.

Tant que la lame n'aura
Pas coupé cette cervelle,
Ce paquet blanc, vert et gras,

A vapeurs jamais nouvelle,
……
N'auront pas agi, l'enfant
Gêneur, la si sotte bête,
Ne doit cesser un instant
De ruser et d'être traître,

変りばえせぬ湯気たてて、
白くて生で脂ぎったこの荷物、
この脳味噌奴をば　刃もて
えぐりとらないかぎりには、
……
しないかぎりは、小うるさい
金てこ頭の小僧っ子が
たくらみしたり裏切ったり
寸時もやめる　筈がない、

その他参照。

et la maladresse dans la lutte : ——

これは日常世俗の世界に処して行く術の拙さを示す。この術は知性、はからひを前提とし、倫理の立場を超えることを許さない。ところが、これらが一切否定されてゐるところには、この拙劣さが出てくる。この拙劣さは単に、なさうとしてなし得ぬ拙劣さではない。かかる術を否定したところに出てくる拙劣さ、かかる術を始めからもたぬか、あるいはもとうともせぬところに出てくる拙劣さである。それはランボオ自身の言葉を借りればやはり一種の race inférieure の一面である（Cf. Mauvais Sang, p. 15, 16, 18.）。この拙劣さこそ無求、無一物を行ずるものであり、そこにランボオ的世界もひらけてくるのである。四行後に、

Les Gaulois étaient les écorcheurs de bêtes, les brûleurs d'herbes
les plus inептes de leur temps.

とあり、p. 14 にも

Sans me servir pour vivre même de mon corps, et plus oisif que le crapaud, j'ai vécu partout.

何の役にも立たず身体さへも動かさず〔生きるためにすら身体も動かさずに〕、それこそ墓よりもまだのらくらと、俺は処かまはず生きて来た。

とあるが、これもこの拙劣さから来る生活の他の面、より積極的な意味をもって語られた面と見てよい。（なほこの点については p. 14, oisif の条参照）

Je trouve mon habillement aussi barbare que le leur. Mais je ne beurre pas ma chevelure : ——

かかる世界はもちろん無求、無一物を行ずる世界であれば、その服装も彼等なみに barbare であるわけである。「頭にバターをなすりつけない」とは、Gaulois には、かかる頭にバターをなすりつける風習でもあったのであらうか。未詳。

Les Gaulois étaient les écorcheurs de bêtes, les brûleurs d'herbes les plus ineptes de leur temps.

野獣の皮を剝ぎ、草を燎き、ゴオル人とは当時最も無能な人種で

あった。

ここは Mauvais Sang, p. 18 の

Me voici sur la plage armoricaine. Que les villes s'allument dans le soir. Ma journée est faite; je quitte l'Europe. L'air marin brûlera mes poumons; les climats perdus me tanneront. Nager, broyer l'herbe, chasser, fumer surtout; boire des liqueurs fortes comme du métal bouillant, — comme faisaient ces chers ancêtres autour des feux.

ゴオルの西岸、アルモリックのほとり。夜が来たら、街々に灯が点るのかしら。役は終った、俺はヨーロッパを去る。海風は俺の肺臓を焼くだらう。未開地の天候は俺の肉を鞣すだらう、泳いでは草を積き、狩しては煙草を燻し、滾り立つ金属の様な火酒をのむ事だ。——焚火を囲んで、あの親しい祖先の人々が為た様に。

とある、これに照応するものがある。そしてこれは恐らくはランボオの愛読した romans de nos aïeules (Délires II, p. 52.) などの中に出てきたものであらう。「自然」の具現としての生活の姿を示すものであらう。

les plus ineptes de leur temps とは、事実さうではあったらうが、それは上記の拙劣さに照応するものであり、したがって oisif, race inférieure とも照応するものである。ランボオ的世界の一面を現はすものである。

D'eux, j'ai: l'idolâtrie et l'amour du sacrilège; — oh! tous les vices, colère, luxure, — magnifique, la luxure; — surtout mensonge et paresse.

御蔭でこの身に備はったものは瀆聖くの崇拝と愛情、——それこそあらゆる悪徳だ、憤怒と淫乱、——淫乱も物々しい奴、わけても嘘と無精だ。

D'eux, j'ai: — l'idolâtrie et l'amour du sacrilège: ——

ランボオは二元対立の相対的世界の否定の彼方に死、虚無、寂静の世界を見出した。さらにそれの否定として、即ち否定の否定、即ち絶対否定即絶対肯定的に、彼岸ならぬ此岸に絶対、神の現成を行じようとした。往相即還相、還相即往相であった。即ちこの「悪の現し世」(Cf. Fêtes de la Patience, Age d'Or: —— Le monde est vicieux.) に絶対、神の現成を行じようとしたのであった。かかる行為の世界がランボオの「自然」でもあった。

かくて、かかる「自然」の具現せる世界としての les Gaulois から、l'idolâtrie et l'amour du sacrilège をうけついだのである。

Cf. Mauvais Sang, p. 20.

On ne part pas. — Reprenons les chemins d'ici, chargé de mon vice, le vice qui a poussé ses racines de souffrance à mon côté, dès l'âge de raison — qui monte au ciel, me bat, me renverse, me traîne.

出発は見合はせだ。——又、足元の径を辿り直すとしようか、この身の悪徳を背負って、物心がついてこの方、俺の脇腹に苦悩の根を下した悪徳を、——空にも翔り、俺を叩きのめしては引き廻す悪徳を。

この還相行、徹底還相行においては悪徳を背負って歩かねばならない。

彼岸への逃避でない限りそれはまぬかれない。しかもそこにこそ、抽象的観念的ならぬ、最も具体的な神の世界が開かれるのである。それは、悪徳はどこまでも悪徳でありながら、しかも悪徳でない神の世界である。道元の言葉を借りるならばそれは「莫作」の世界である。

ランボオにおける「自然」は、かかる悪にゐて悪にゐず、善にゐて善にゐず、善も悪も「一切是」とする世界であつた。l'idolâtrie et l'amour du sacrilège とはかかる意味でいふのである。

Cf. Matinée d'Ivresse.

On nous a promis d'enterrer dans l'ombre l'arbre du bien et du mal, de déporter les honnêtetés tyranniques, afin que nous amenions notre très pur amour.

俺達の最も純粋な愛を醸し出す為に、善悪の樹を暗闇の中に埋葬し、暴君的な誠実を流刑に処する事を、俺達は約束されたのだ。

かく善悪にゐて、善悪を超えた立場であつたのである。上掲、Mauvais Sang, p. 20 における

le vice …… —— qui monte au ciel

といふのも、かかる莫作の世界を意味する言葉と解すべきものである。

Oh! tous les vices, colère, luxure, — magnifique, la luxure ; — surtout mensonge et paresse : ——

莫作としての sacrilège の世界に絶対、神の現成を行じようとする。したがつてそこには、あらゆる悪徳、怒、淫乱が現はれる。しかしランボオにおいても、あたかも維摩における様に「淫怒痴即是解脱」であつたのである。

mensonge は Mauvais Sang, p. 20 においても

Quel mensonge dois-je tenir ?

どんな嘘をついてはならないのか。

といつてゐる。そしてこの節 (p. 20—p. 21.) の最後で

O mon abnégation, ô ma charité merveilleuse ! ici-bas, pourtant !

あゝ俺の自己抛棄と見事な愛、だが下界は下界だ。〔だが、下界でだ。〕

といつてゐる様に、この嘘は完全な自己抛棄に生れた嘘である。

Paresse はランボオにおいては特に重要な概念である。L'impossible, p. 69 で

je retournais à l'Orient et à la sagesse première et éternelle.

—Il paraît que c'est un rêve de paresse grossière !

俺は再び東洋に帰つた。永遠の、当初の叡知に帰つた。——なんの事はない、御粗末な怠け者の夢か。

といつてゐる。この paresse は日常常識的世俗の世界における怠惰ではなく、上来述べ来つた様な意味における自然法爾の姿としての paresse である。それは Mauvais Sang, p. 14 で

Sans me servir pour vivre même de mon corps, et plus oisif que le crapaud, j'ai vécu partout.

といつてゐる、この oisif にも通ずるものである。その oisif はまた Jeunesse, IV, で

Des êtres parfaits, imprévus, s'offriront à tes expériences. Dans tes environs affluera rêveusement la curiosité d'anciennes foules et de luxes oisifs.

予見を許さぬ、完璧な諸存在が、お前の様々な経験に、献げられるだらう。お前の身の周りには、古代の群集や無為の栄耀に対する好奇心が、夢の様に溢れるだらう。

といってゐる様に、「絶学無為閑人」の無為の世界であり、そこに予見することのできぬ、完璧なる諸存在、即ち神が現成するのであり、正に無為の栄耀といはれる世界である。paresse はかかる無為の栄耀を意味するものであり、また後に出てくる「けものたちの至福」félicité des bêtes にも通ずるものであり、さらに言葉を換へていへば「木石心」の世界でもあるわけだ。Phrases においても、

Qu'il n'y ait ici-bas qu'un vieillard seul, calme et beau, entouré d'un《luxe inouï》, — et je suis à vos genoux.

『前代未聞の栄耀栄華』に取り巻かれて、静かな美しい老翁だけが、たった一人、この下界に棲んでゐてくれたら。——私は貴方の膝下にひれ伏します。

といってゐる。

J'ai horreur de tous les métiers. Maîtres et ouvriers, tous paysans, ignobles. La main à plume vaut la main à charrue.—Quel siècle à mains!—Je n'aurai jamais ma main. Après, la domesticité mène trop loin. L'honnêteté de la mendicité me navre. Les criminels dégoûtent comme des châtrés: moi, je suis intact, et ça m'est égal.

凡そ職業と名のつくものがやり切れない。親方〔教師〕、職工、百姓〔みんな百姓だ〕、穢はしい。ペン持つ手だって鋤とる手だって同じ事だ。なんと、手許り幅を利かせる世紀だらう。こんな手などは誰にでも呉れてやる。と言って奴隷の身分といふ奴も永持ちし過ぎる代物だ。物乞ひの正直さを思へば、俺の心は痛むのだ。罪人も厭はしい、去勢者も厭はしい。〔罪人は去勢者の様に厭はしい。〕この俺に何の係りがある。どっちにしても同じ事だ。

J'ai horreur de tous les métiers:——

この les métiers は下に出てくる la main に対応する言葉である。「手」による職業である。

La main, le langage: voilà l'humanité. (Berr)

手と言語、ここに人間が生れる。

といはれる様に、動物との間に一線を劃する人間、広義の文化的人間の出発は、この「手」と「言語」との発明にあったともいへる。それはもちろん、知性と社会性とを前提とする。といふことは、二元対立の相対的世界、科学的、常識的世界の出発点でもある。この la main に対応する les métiers は、かかる相対的世界、科学的、常識的世界の否定を媒介とするランボオ的世界からは、もちろん嫌悪すべき、否定せられるべきものであった。

Cf. Ouvriers.

La ville, avec sa fumée et ses bruits de métiers, nous suivait très loin dans les chemins.

町は生業の煙と音とを伴って、道々、遠くから俺達をつけて来た。

Cf. Ville.

Ces millions de gens qui n'ont pas besoin de se connaître amènent si pareillement l'éducation, le métier et la vieillesse, que ce cours de vie doit être plusieurs fois moins long que ce qu'une statistique folle trouve pour les peuples du continent.

自分を識らうとする要求を持たぬこの数百万の人々は、すべて一列一体、教育を、職業を、老齢を曳摺って行く。これでは人の生涯は、ある気違ひ染みた統計が、『大陸』の人々に就いてしらべた処より、幾層倍も短いものに違ひない。

この様に、職業は、ランボオ的世界からは否定せられるべきものとしてあげられてをり、それは自己を、真実を識らうともしない人々の生涯ひきずって歩くものであって、職業をひきずって歩く人々は所詮は「亡霊共」spectres に過ぎない。

そしてこの否定せられる職業は、もちろん上述の様に知性と社会性とに出発点をもつ相対的世界のものとしてであるが、この否定には本節の終りの方に出てくる oisif な世界への脱出の意味がこめられてゐることはいふまでもない。

Maîtres et ouvriers, tous paysans, ignobles : ——

この maîtres は下の la main à plume に、paysan が同じく la main à charrue に対応する。したがってこの maîtres は知性の象徴としての教師をいふのであらう。ランボオは、相対的世界、文化の根拠としての知性を否定してゐる（Cf. Soleil et Chair ; Les Assis ; Honte ; L'impossible etc.）。

ouvriers は maîtres に対して町の肉体労働に従事する職工を指すのであらう。

paysans はここではやはり職業の一つ、手による職業として否定せられてゐるのである。同じ paysan といふ語を使ってはゐるが Adieu, p. 84 に於いて

je suis rendu au sol, avec un devoir à chercher, et la réalité rugueuse à étreindre ! Paysan !

務めを捜さうと、この粗々しい現実を抱きしめようと、土に還る。百姓だ。

といってゐる、この paysan とは意味を異にしてゐる。

ignobles とは、ランボオ的世界は絶対、神の世界であり、したがって pur であり noble であったのであり、したがって否定せられるべきものとしてこれらが ignobles であったわけである。

La main à plume vaut la main à charrue. —Quel siècle à mains ! — Je n'aurai jamais ma main : ——

La main à plume に対応する maîtres と la main à charrue に対応する paysans とでは、一見大きな距りがある様だが、いづれも「手」による職業としては、知性と社会性とにその根拠をもつものとしては、即ちいづれも広義の culture に属する職業としては同一であり、oisif な世界への脱出の立場からは否定せられるべきものである。そしてこの culture は知性と社会性とにその出発点をもつものである故に、それは人間が人間として出発したその日から始まるといってよいわけであるが、近代ヨーロッパはその典型であり、頂点にあったのであるから Quel siècle à mains ! といふわけである。

かくて oisif な世界への脱出をめざすランボオは je n'aurai jamais ma main といふわけであり、そこに自然法爾の世界としての oisif な世界がひらかれ、そこに神が現成するわけである。

Après, la domesticité mène trop loin : ——

一切の手、職業を拒否した。そして oisif な世界への脱出を求めた。だがこの oisif な世界は、裏返せばそのままに生々流転の軽さをもつ世界でもある。ところがこの一切の手、職業の拒否、否定は生々流転、展開の軽さ、その自由、解放を殺して domesticité へ陥る可能性をもつ。

Vagabonds において、

((Je ne me saisissais pas fervemment de cette entreprise. Je m'étais joué de son infirmité. Par ma faute nous retournerions en exil, en esclavage.))

『この計画をしっかりと俺は摑んでゐなかったのだ。俺は、兄貴の弱点を弄んでゐた。俺の見込違ひから、二人は流浪の身に、奴隷の身分に、成り果てるかも知れないぞ。』

といってゐる。この esclavage の状態には、この後で述べてゐる état primitif de fils du Soleil「太陽の子の原始の姿」は求むべくもない。

また、Jeunesse, III, Vingt Ans で

Un chœur, pour calmer l'impuissance et l'absence !

合唱だ、無力と欠乏とを鎮める為に。

といってゐるところは、今ここで述べてゐることを裏書きするものとして重要視される。即ち l'impuissance が la domesticité に、そして l'absence がつぎの la mendicité に照応するものと考へられるからである。

即ち la domesticité とは一種の無力の状態を意味してゐるものと考へられる。

かくて la domesticité といふのは、一切の手、職業の否定、拒否の結果、陥る可能性のある無力の状態、その意味での奴隷の状態をいふのであり、そこには「太陽の子の原始の姿」は求むべくもなく、したがってランボオ的世界の一面としての luxes oisifs「無為の栄耀」に反するものとして、言ってゐるものと考へられる。一切の知性、文化の否定、そこに死の世界、虚無の世界が現はれるが、この死の世界、虚無の世界は裏返せば即軽やかな解放、展開の世界でなければならない。そこにこそランボオの oisif の真義があるのである。したがってかかる軽やかな解放、展開の裏打のない無力な状態としての奴隷の状態は却けられるのである。しかも一切の手、職業の拒否、否定の結果としては多分に陥る可能性があるのである。

しかし、この domesticité も、つぎに出てくる mendicité も一応は、日常実利的世界の否定の彼方の「死の友」amis de la mort としての意味はもってゐるのであり、その限りにおいてランボオの思想的遍歴の中では、これらに対して、jalousie を感じたこともあるのである。

Cf. Adieu, p. 86.

Mes derniers regrets étaient, — des jalousies pour les mendiants, les brigands, les amis de la mort, les arriérés de toutes sortes. —

Damnés, si je me vengeais !

俺の最後の未練は逃げる、——言はば乞食、盗賊、死の友、あらゆる落伍者の群への嫉妬だが、——復讐成った以上は亡者共だ。

また、Matinée d'Ivresse において、

Rire des enfants, discrétions des esclaves, austérité des vierges, horreur des figures et des objets d'ici, sacrés soyez-vous par le souvenir de cette veille.

子供等の笑ひ声、奴隷共の慎み深さ、乙女達の厳格さ、此処に横はる様々な顔、様々な物象の醜怪さ、君達はこの徹夜の思ひ出によって神聖なものとなれ。

といってゐる様に、乞食に jalousie を感じ、奴隷の慎み深さを想ってゐるのであり、一面、これを経ることにより神の世界に到りつくことを考へてゐるのである。

にもかかはらず、上記の様に domesticité を却けるのは、ランボオの世界が単純な往相の世界にのみあったのではなく、往相即還相として、この此岸の世界に神の現成を行じようとするのであったことに基くのである。即ち、domesticité は「死の友」としての意味をもつものであり、その限りにおいては、それに対して jalousie をも感じ、そこを経ることによって神の世界に到ることも想ふのであるが、還相行においてはさらに、これが否定され、裏返しにされねばならず、domesticité は「死の友」としての意味しかもたぬものとして否定せられるのである。そこにはじめて、解放せられた此岸の世界における自由な、軽やかな生々流転、展開が見られるのであり、domesticité ではない oisif な世界が開かれるのである。

L'honnêteté de la mendicité me navre : ——

この mendicité は前述の様に、上掲の Un choeur, pour calmer l'impuissance et l'absence における l'absence に対応する。やはり「死の友」であり、l'absence としての mendicité には、還相行における自由な軽やかな発展展開が見られない。かかる mendicité の正直さには心が痛むわけである。

上掲 Adieu, p. 86 のほかにも L'éclair, p. 76 で

Non ! non ! à présent je me révolte contre la mort !

いや、いや、今、俺は死に反抗する。

mendiants, brigands いづれも「死の友」であり、還相行においてはかかる死に反抗しようとする。

Bateau ivre の二十三節においても

Mais, vrai, j'ai trop pleuré ! Les Aubes sont navrantes.

されど、げに、余りにわれは泣きたりき、あけぼのは胸を抉(エグ)りて痛し。

といってゐる。この Les Aubes は「フロリダ」につきあたるまでに見出された曙であり、即ちそれは否定の彼方に見出された世界としての Les Aubes である。この Les Aubes が navrantes である様に l'honnêteté de la mendicité も navrante であったわけである。かくて Bateau ivre, 23e においても O que ma quille éclate ! O que j'aille à la mer ! 「おお、龍骨よ破裂せよ。おお、海底にわれを沈めよ。」といふわけである。これは上掲の「死に対する反抗」と同じ意味を現はすものであり、還相行を語る言葉である。

Les criminels dégoûtent comme des châtrés : ——

Les criminels は、Une Saison en Enfer, p. 8 の

Je me suis séché à l'air du crime.

のところで述べた様に、これは世俗としての現世からの逸脱を求める心の渇きであった。同じくその箇処でふれておいた様に Délires I, p. 44 の

Oh! ces jours où il veut marcher avec l'air du crime.

これも世俗としての現世の否定行を意味してゐた。かくてここの場合の criminels も、同様に世俗としての現世を否定しようとする者達、しかもこの場合は、単に否定の彼方の l'impuissance, l'absence としての、「死の友」としての、domesticité および mendicité の両方を指すものと考へられる。したがってそれはあたかも「去勢者」の様にいとはしいといふわけである。もちろん、それは還相の立場においていふ言葉である。

moi, je suis intact, et ça m'est égal : ——

かくてこれらはいづれも、還相の立場におけるランボオとしては何の係りもなきものであり、いづれも等しく否定せられるべきものである。

Mais! qui a fait ma langue perfide tellement, qu'elle ait guidé et sauvegardé jusqu'ici ma paresse? Sans me servir pour vivre même de mon corps, et plus oisif que le crapaud, j'ai vécu partout. Pas une famille d'Europe que je ne connaisse. — J'entends des familles comme la mienne, qui tiennent tout de la déclaration des Droits de l'Homme.—J'ai connu chaque fils de famille!

ああ、それにしても、俺の言葉がこの身の怠情を今日の今日まで導き護って来たとは。さう迄不実な言葉とならうとは。誰の仕業か。何の役にも立たず〔生活のために〕身体さへも動かさず、それこそ墓よりもまだのらくらと、俺は処かまはず生きてきた。凡そヨオロッパの家庭で、俺の知らないのは一つもない。——手に取る様に解るのだ。どれを眺めても、『人間諸権利』の宣言を後生大事と握ってゐる。家庭の子等は、どいつもこいつも知ったのだ。

Mais! qui a fait ma langue perfide tellement, qu'elle ait guidé et sauvegardé jusqu'ici ma paresse? : ——

この perfide といふのはどういふ意味であらうか。さきの criminels が日常常識的立場から見て、その世界の道徳的破壊者としての criminels であり、そのことは即ち日常常識的世界の否定、即ちそのことがランボオ的世界がひらかれるための契機であった。それと同じ様に、この perfide も、日常常識的世界を裏切る言葉としての意味をもってをり、かかる日常常識的世界を否定する言葉、それがやはりランボオ的世界のひらかれるための一つの契機としての意味をもってゐるのである。

かかる言葉であってこそ、今日まで自己の paresse を導き護ってきてくれたのであり、この paresse を導き護ってきてくれた言葉は、日常常識的世界を裏切る不実な言葉であるわけだ。

Sans me servir pour vivre même de mon corps, et plus oisif que le crapaud, j'ai vécu partout : ——

かくて、この不実な言葉に導き護られて、生活のために身体さへも動かさずに、墓よりも oisif に、処かまはず生きてきたのである。

この oisif であるといふことは p. 13 における paresse の条ですでに簡単にふれておいた様に、ランボオにおいて極めて重要な意味をもつも

のである。oisif であるといふことは paresse と同様に、日常常識的世界における反道徳的な意味をもつものではなく、二元対立の相対的世界が一切否定せられて、一元的絶対の世界が現成する、その一元的絶対の世界において道徳を超えた意味をもつものである。

それは日常世界における実利的生活からの頽落、その否定を語るものである。しかしそこにこそ Délires II, p. 55 で

Je finis par trouver sacré le désordre de mon esprit. J'étais oisif, en proie à une lourde fièvre : j'enviais la félicité des bêtes, — les chenilles, qui représentent l'innocences des limbes, les taupes, le sommeil de la virginité !

この精神の乱脈も、所詮は神聖なものと合点した。堪へ難い熱に憑かれて無為の日を過しては、俺はけもの等の幸福を羨んだ。穢れしらぬ土龍の睡りや、幽界の無垢にも似た青虫を。

といってゐる様な「けもの等の至福」があったのである。一切の「はからひ」のない自然法爾の姿がそこにこそ現成したのである。また、「予見を許さぬ、完璧な諸存在」神が現成し（Cf. Jeunesse, IV.）、それこそ「前代未聞の栄耀栄華」（Cf. Phrases.）であり、「無為の栄耀」といはれるにふさはしい世界であったのである。一切の「はからひ」がないといふことは、一切の停滞、執着のないことを意味し、したがってそこには、Mauvais Sang, p. 28 において

moi, ma vie n'est pas assez pesante, elle s'envole et flotte loin au-dessus de l'action, ce cher point du monde.

処が俺の生活は一体目方が掛からない。世界の重点、行動といふものの遙か上層に飛び去り、漂ってゐるのだ。

といってゐる様な「軽さ」があり、この「軽さ」があるが故にこそまた同 p. 22 で

Faiblesse ou force : te voilà, c'est la force. Tu ne sais ni où tu vas, ni pourquoi tu vas, entre partout, réponds à tout. On ne te tuera pas plus que si tu étais cadavre.

強気にしろ、弱気にしろだ、貴様がさうしてゐる、それが貴様の強みぢやないか。貴様は何処に行くのか知りはしない、何故行くのかも知りはしない、処構はずしけ込むし、何が厭だと言ふわけでもない。貴様がもともと屍体なら、その上殺さうとする奴もあるまい。

といっている様に「処構はずしけ込」み、「何が厭だ」といふこともない、いはば無辺際界における行雲流水の自在さも出てくるわけである。今ここで、j'ai vécu partout といっている意味も、かかる意味をふくんでいるものと解釈せねばならない。かかる一切の「はからひ」のない、無辺際界における軽やかな、行雲流水的自在さにおいてこそ、同 p.25 で

Je n'ai point fait le mal. Les jours vont m'être légers, le repentir me sera épargné. Je n'aurai pas eu les tourments de l'âme presque morte au bien, où remonte la lumière sévère comme les cierges funéraires.

俺は悪を冒した覚えはない。俺には、その日その日は爽やかに過ぎて行く、先き先き後悔する事もあるまい。幸福に会っては死人同然な俺の魂に、悩みの時が来ようとも思はれぬ、ここに葬礼の燭影

にも似た、厳めしい光が、又浮びあがるのだ。

といってゐる様な、悪にゐて悪にゐないといってよい様な、いはば「莫作」の世界、「無畏」の世界もひらかれてくるのである。

oisif な世界は、一元絶対の世界にひらかれたかかる世界であった。しかし一元絶対の世界は二元相対の世界を媒介としてのみ現成する。この相対即絶対、絶対即相対の世界においては、Phrases で

Qu'il n'y ait ici-bas qu'un vieillard seul, calme et beau, entouré d'un ((luxe inouï)), — et je suis à vos genoux. (前に引用)

といった後で

Que j'aie réalisé tous vos souvenirs, — que je sois celle qui sait vous garrotter, — je vous étoufferai.

あゝ、私が、貴方のすべての思ひ出を実現した身ならば、——貴方を絞め殺す術を心得てゐる女ならば、——私は貴方を圧し殺すでせう。

といってゐる様に、oisif は oisif であって、しかも oisif ではないのである。

Pas une famille d'Europe que je ne connaisse : ——

このヨーロッパは L'impossible, p. 68 で

je vois que mes malaises viennent de ne m'être pas figuré assez tôt que nous sommes à l'Occident. Les marais occidentaux !

俺の数々の煩悶は、俺達は西洋にゐるのだと早く悟らなかった事に由来する、と俺は気付く。西洋の沼々よ。

といってゐる、沼としての西洋、煩悩苦悩の根源、由来するところとしてのヨーロッパであり、「当初の永遠の審知」たる東洋に対するものである。

かくてそれは、かかる審知とは縁のない、下記の「人間諸権利」の宣言を後生大事としてゐる様な家庭ばかりだとの意、したがってそこには俺のすむ世界はないとの意がこめられてゐる。ここにつぎの節で Mais toujours seul ; sans famille といっている様なランボオの孤独があらはれてゐる。

J'entends des familles comme la mienne, qui tiennent tout de la déclaration des Droits de l'Homme : ——

この déclaration des Droits de l'Homme は詳しくは Déclaration des Droits de l'Homme et du Citoyen といはれるもので、一六八八年、イギリス議会がこの宣言を発し、ひきつづきアメリカ合衆国においてもこの宣言が可決された。それは十七条より成り、第一条に

Les hommes naissent et demeurent libres et égaux en droits. Les distinctions sociales ne peuvent être fondées que sur l'utilité commune.

(Larousse)

とある様に、権利としての人間の自由と平等とをうたったものである。そしてこの宣言はルソーの思想などよりは重農主義者 physiocrates の思想に由来してゐるものである。

ケネー Quesnay を創始者とするこの重農主義者達は、国家の、経済生活に対する保護干渉を排し、重工業の重視に反対し、自然の秩序を実現する完全な国家は農業を基礎としてのみ可能であるとする。

この背後にはカソリックにおける神の摂理、神による均衡、統一の思想がある。且つこの宣言は当時の政治的闘争においては常に標語として用ゐられてゐたことも合せ考へねばならない。

したがって、ランボオは、この宣言にキリスト教的、ヨーロッパ的精神をよみとってゐるのである。根源的永遠の東洋の睿知の世界にひらかれたものではないとしてゐるのである。即ち、どいつもこいつも、東洋の睿知からは遠ざかったヨーロッパ種だ、キリスト教種だ、手にとる様にわかってゐるのだとの意で言ってゐるのである。またこの宣言が当時の政治的闘争と結びついて常に標語の様にして使はれたために、つぎの節で Je ne puis comprendre la révolte といってゐる様に、この宣言と革命暴動とを結びつけて、かかる政治的闘争からは超脱したランボオとしては、かかる宣言を後生大事としてゐるものをすべて、否定すべきもの、嫌悪すべきものとしてみてゐることはいふまでもない。そこに対比的に「墓よりものらくら」とした oisif な面が浮き立ってきてをり、つぎの節の

Ma race ne se souleva jamais que pour piller : tels les loups à la bête qu'ils n'ont pas tuée.

俺の人種が立ち上ったのは掠奪の時と決ってゐた、死肉を漁る狼の様に。

といふ、この「死肉を漁る狼」なる言葉が、ランボオ的世界の一面を語る言葉として対比的に浮き上ってくるのである。

J'ai connu chaque fils de famille : ——

ここに、どいつもこいつも、みんな同じだといふ様な感じが改めて強調されてゐる。

（未完）